

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 63: 57-63
Issue date	1898-02-17
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5060">http://hdl.handle.net/2298/5060</a>
Right	

◎新年書懷

日月轉換えてやまず、明治三十年も、いつまか暮れて、茲に三十一年の新春を迎ふるに至りぬ、吾人果て如何の感かある、

それ、人は活動の性質を有す、年新なれば、こゝに新なる生涯あるは、もと必然の數なるのみ、吾人は如何にして、此新生涯に入らんとするぞ、明治の時代も、はや三十一の年を重ね、吾人が社會の活動場裡に出るの日は、茲に一步を進めぬ、吾人は如何にして、此活劇を演せんとするか、口に平和を唱へて、爭奪を事とし、表に公法を稱して、陰に私慾を逞ふせんとする、萬國對峙の間に處する吾人が準備は如何、これ等は、吾人が新年の劈頭に於て、自身に與ふべき問題の重なるものと信ず、徳性の涵養なさるべからず、學問の研究務めざるべからず、体力の習練遂げざるべからず、これ等の爲めに、如何に此一年に處すべ

きか、これ等は、新年の劈頭に於て、講すべき準備の重なるものと信ず、一日の計は朝にあり、一年の計は歲首にあり、あはれ、吾人をえて、假令一日たりとも、一分たりとも、無意義に日を過すとならしめよ、凡そ解くべき千百の疑問、なすべき千百の準備は、吾人が身邊に蜩集せり、若し今日にして、疑問の一を解かず、準備の一を欠かば、異日社會に立たん日には、必ずそれ文け、人後に落つることを、自覺せざるべからず、

現今學生間の風潮、滔々として研究準備に向へるが如し、研究は疑問を解く所以なり、吾人は一面之を視するともにも、他面亦戒めざるべからざるものあるを信ず、思ふに、研究準備に銳意するの結果、所謂質實となり、贅實の餘、姑息に流れ、邁往の氣慨に乏まきは、學生一般の現狀にはあらざるなきか、質實は可なり、姑息に至りては、斷じて不可なり、血あり、涙あるは、固これ青年の本性、之が爲めに激越し、之が爲めに慷慨す、進歩改革の神が、常に其頭上に宿るも、偶然にあらざるなり、若し青年にして此本性を失はば、吾人は國家の前途の爲めに、其の可なる所以を知ら

ざるなり、今や、極東最も多事の時に遭遇し、天下の英俊を待つこと、愈急なり、吾人豈大に戒めざるべけんや、多望なる新春を迎ふに際之、感懷を陳べて互に規し、なほ健全なる心身の發達を祈る、

## ◎遙 拜 式

去ぬる一月十一日は皇太后陛下の御一週年に當らせられ之により教職員は言ふも更なり、本校生徒の數を盡して運動場に立いで整列して、恭しく遙拜式を行へり。式は午前九時に始まり、先づ校長を始め奏任官及び奏任官待遇は一列をなして進み出で御櫛に向ひて最敬禮を行ひ、然る後歩を移してそが右方に立列びぬ。次に判任官以下の教職員歩み出て前の如くし了りて御櫛の左方に立列びぬ。夫より順次生徒の最敬禮ありき。肅然容を改め頭を低るゝ際、限なきたふとさと言はむ方なきかなしさと交々胸を填め、身を襲ひ來て、神がくれ給ひしことの未だ昨日の如き心地せらるゝに、早くも月日の積りぬるを夢かとのみ思ひたどられき。數にもあらで陌の塵

にも比ぶべき生等の身さへなほ此の如し、まゑて九重雲ふかき御あたりは今日に遇ひ給ひて如何なる御心地がし給ふらむ、如何に忍ばせ給ふらむと思ひやり參らせつゝ心ぎももつくる様なりき

## ◎射初式概報

(星川子投)

弓矢の器たる天地の徳を備へ陰陽五行の理を寫すものなれば國々嶋々に至るまで皆尊まざるものはなかりき中にも其徳勝れたるは我が日の本も弓矢にて神明引目の法より堂前草射の術に至るまで備へざるものはなき故飛道具のまだはやらざる頃は只一の武器として仰がれ『男子の八歳といふ初春に弓始するものとこそきけ』の歌の如く武士の家に生れてはみな幼少のときより斯道の心掛なきものはなかりけりされど物移り星變り變遷に變遷を重ねて明治の御代となりてより彈丸獨り時を得顔に誇り弓矢は骨董店上塵積ること三寸手にとるものだになきは歎はしき限りにてこそかく世の人々が弓矢を卑むは『弓矢は只敵を殺すためのものにて他に少しの効能な

し明治の御代には彈丸あり弓箭何んの用かなさん』と空嘯吹き皮想の觀察をなすより誤まれるものにて斯道は身体の健康を助くる傍らに猶仁義禮智信を養成する一の貴重すべき器なることを知らざるが故なり若し斯道の奥義を極めなば孟子の所謂不動心をも之れにより悟ること難からじ全校七百有餘の同胞よ紅爐を擁して空しく睡眠を貪らんより奮然蹶起して寒風に櫛り心膽を練らば其得るところ蓋多からん休題弓術部は去る十七日午後より翠綠滴る松林の間にて射初式を行ひぬ此日は細雨頻りに降り風さへいと吹き荒びければ來會者如何あらんと思ひしに生駒師範杉山部長大浦園東の諸先生より檜林吉田内藤山口相良磯納富蒲池等の諸氏に至るまで二十有餘名の多さに及べり各今日こそは功名手柄して頼光與一等を後へに瞠君たらしめんと思ふ心のはの見へて隠さんと思はるゝぞ是非もなし午后二點鐘を相圖とし台矢はふられ五色の的はかけられたり五色の的とは青赤白黒を上下左右に實を真中に置き中れる的より順次にとりはづすなり一立目に久留米の住人磯君が

満月のごとく引絞り『ヒュー』と放てば過またず見事に黒的を射たりける拍手四方に起り磯君の鼻高きこと五寸一立は過ぎぬ四的は猶依然たり勇士の面々此立こそは會稽の恥辱を雪がんと力身かへりて待ち受くる二立目は初まりぬ衆目の中心點なる黃的は誰れの手にか落つべき諫早の人蒲池君が此處ぞ大事と射りし矢に黃的は遂に其光りを失ひけり歡聲未だ歇まざるに赤的は平戸の士檜林君が狙ひ定めて放つ矢に貫かれぬ又もや起る拍手の音暫時は鳴りもやまさりける三立目に至り之れも久留米の住人内藤善助君が武德會の失敗を今日こそ回復せんと注意に注意を加へつゝ切て放てば白的は黒點を生ず名譽回復は見事に出來たり内藤君萬歳殘るは只青的のみ殘將等の動悸は鼓のごとく響き初めぬされど『セケ』ば『セク』程的中するものならず衆皆此秘法を忘る容易に的中はがなひがたし或は『コッ』と音のみさせて眉顰むるものあり或は三尺も距りたるところに射て殘念と叫ぶ未練者あり或は又壁を射て鞍にかゝりてはなれがはるきが故に『スマス』人もあり斯くするうちに青的は遂に薩

摩隼人長野君の仕留め玉ふところとなる君の愉快やいかならん於是乎的中者には例の通り末廣の扇子を賞として與へらる拍手喝采の音盛んに起り樹梢の小鳥は膽をつぶして飛び失せぬ是れより余興として源平競射をなせしに第一回は一組一點の差を以て勝ちけるが第二回には三組の利するところとなり二組のみ獨大々の不平を漏

らす然かも自業自得のみ又誰れをか恨みん第三回には再び一組の勝利に歸せり既にして鬨鳴たる喇叭の音針葉を縫ひ來りて吾等に食事を告げれば弓術部萬歳を三呼して射初式も無事終りをづけぬ

概して此度の射初式は好結果を得たるは部員諸氏平素の熱心の然らしむるところと感心するより外なし然れど新部員諸氏猶次の二歌を味ふを要す

『つとめ得ぬ身には器用も何かせん

すさこそ終に上手とはなれ

『千里より外にゆかんとおもふには

一足よりも絶たぬるべし

### ◎龍南同窓會消息

明治二十九年五月九日、第一會を東京駒込吉祥寺に開きてより、昨三十年九月に至るまで都合六回にして、三十年二月、會報第一號を出し、第二號を昨三十年十二月に出す、會毎に盛大、號毎に快愉、今其第二號所載によりて第四大會に於ける狀況を記さん。

明治三十年二月十三日吾同窓會大會を兼ね、遞信技師三根正亮君歸朝歡迎會を吉祥寺に開く、蓋し大會の定期常には一月の制規なりしも、英照皇太后陛下の崩御在しませしかば、謹慎の意を表し、爲めに今日に至りたるなり、會者二十九名、特に嘉納先生、三根氏、藤本氏出席せらる、大會としては、多しと謂ふへからざるなり、六時開會、委員先つ立て開會を報し、且三根君の歸朝と藤本君の内務省榮轉を祝し、是に於て三根君立て得意の快辨當日の謝辭を陳へ、又旅行中の實驗談を試らる、布哇に於る日本人の狀態、米國社會の有様等君か耳目に見聞する所、談し來り談し去り聽衆をして得る所あらしめたり次に、藤本君は、名古屋土産なりとて、同地方か古昔織

豊二氏を始め幾多の人傑を生せしに係らず、今日に至り該地方の人士中敢て異常の士を出すなき者、畢竟彼の地方人か英雄崇拜心に乏しく太閤信長の墳墓廟社さへも荒廢傾朽に任せて敢て省る者なきに因るとて、其目撃する處に就きて話さるゝ所あり、畠氏か上京の途中に得られたる詩歌數句を吟せらる何れも奇想天外より落るもの、終て幹事隈本氏は、本會の報告を爲ま且幹事山川君例規により交替すへき筈なれば、改撰を満場に請求せられしも、満場、幹事にて適宜推撰ありたしとの事を以てし、之を幹事に委任せり、此時杯盤已に備はり、献酬方に隆なり、已に酔へる者は、吟し、未酔者は談る少焉「圓陣作れ」の號令は、或一人の口より叫ひ出され、三根藤本の二氏を圍み圓陣作られたり、三根君の得意談、藤本君の得意辯興益加はる時に嘉納先生亦來り會せらる、先生亦圓陣中の捕虜となる、先生例に由て快談せられ、歐洲滞在中の失敗談より社會上の實驗談に及ぶ、加之チャンケンの一聲は、既に佳境に到り、圓陣の各か固めを打棄てゝ、場の一隅に陣取り、杯の飛ぶ事矢の如く瓶子隨て來

れば、隨て倒れ、さしも、數多の甄子等も此等一群の勇士の爲めに切り伏せられ、一人も、残らず倒れたるぞ愉快なる、散會殆んど十二時（鶴田、牧山、田中、岩倉、家入、原口）第七回の會合は今一月の制規なるよしなれば、日ならずして、吾人は又、壯快なる『勇士』の『瓶族』討滅の武話しも聴くとを得んか。樂いかな。」因に記す、同會は、我五高の學修を卒へしと否とに論なく、一たび窓を同うして、龍南の賣舎に學ひしものは、永久是が會員として、麗澤相潤し、毫も相渝らざらしめんとするものなり、今左に同會の綱領と細則とを記さん。

### ◎龍南同窓會綱領

- 第一條 本會は龍南同窓會と稱す
- 第二條 本會は事務所を東京に置く
- 第三條 本會々員は龍南會出身大學々生學士及同會に緣故あるものを以て組織す
- 第四條 毎年二回春秋に總會を開く
- 第五條 本會は毎年二回宛報告書を出し會員の異動を報するの機關に供す
- 第六條 學士及獨立の生計を営むものは會費と

して毎年五拾錢其他の會員は毎年貳拾錢を納むべし

第七條 本會に幹事三名を置き本會に關する一切の事務を掌らしむ

第八條 幹事の任期は一ケ年半とし總會の都度一名宛を改撰す

第九條 會費は報告書調製及遞送に當て殘金は郵便貯金局に預け入る可し

第十條 預金は總會の決議を経るにあらざれば消費することを得ず但在京會員二分の一の出席を要す

第十一條 會費の出納は幹事の名を以て報告書に詳細に掲出すべし

第十二條 本綱領は總會(在京會員二分の一以上の出席ある)の決議を経るにあらざれば之を變更するを得ず

### ◎同窓會細則

一 龍南同窓會は隔月一回之を開く但九月及一月の兩會を總會とし他を例會とす

二 本會に委員五名を置き其任期は本會開會を周旋すること一回にて終る

三 幹事は委員を指揮監督し會の秩序を維持し其他本會規則の實行を監視す

四 幹事には例會及總會の會費を免除す

五 本會に於ては臨時討論演說を爲すことある可し

六 本會々員は異動ある毎に其旨幹事に報告すべし

### ◎來 信

(明治廿九年四月廿四日議決)  
在文科大學の本田弘君よりわが硯友會に宛て左の諸書は閑暇の際一讀して其内容を知り置くこと便利ならんと通知し來れり依てこゝに本紙の餘白を借りて偏ねく會員諸君に紹介之併せて同好の諸士に示す、

本朝辭源。同文通考。東雅。和字通例全書。

和字正濫抄。假名本末。漢字三音考。字音假

名用格。かざし抄。あゆひ抄。玉の緒。磨光

韻鏡。語學信書。古史本辭經。倭訓栞。新選

字鏡。西洋紀聞。日本釋名。近世畸人傳。古史傳。

又源氏物語の參考書には

源氏評釋の初め六卷。玉の小櫛の首卷。紫家

七論は是非必用、源註餘滴。忍ぶ草。天のさ  
るづりもよし、

次に近刊の契沖阿闍梨と國學三遷史は購ふも決  
して損にはならず、(硯友會幹事投)

## 校 報

我校の消息を報するに要用なる項を信下特に此欄を設く。

當校雇を命す (二月十二日)

依願免本官 (全日)

任第五高等學校教授(一月廿二日)

叙高等官六等、五給俸下賜

幹事を命す

教頭を命す

圖書監理を命す

庶務主任を命す

學寮主任を命す

圖書主任心得を命す

教務主任心得を命す

今般校務分掌規程の改正ありたり左の如し。

### 校務分掌規程

第一條 校務ヲ分掌スル爲メ教務課、庶務課、會計課、圖書課及  
學寮課ヲ設ケ

第二條 教務課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 教案及日課配當ニ關スルコト

二 試驗及其成績表ニ關スルコト

三 生徒ノ學級ニ關スルコト

四 生徒ノ出席ニ關スルコト

五 教員諮問會ニ關スルコト

六 生徒ノ身體検査ニ關スルコト

七 前項ノ外教務ニ屬スル事項

第三條 庶務課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 校長ノ官印及校印ヲ管守スルコト

二 職員ノ進退及身分ニ關スルコト

三 傭外國人ニ關スルコト

四 校則ニ關スルコト

五 文書ノ接受及發送ニ關スルコト

六 一覽及報告ニ關スルコト

七 宿直ニ關スルコト

八 第五地方部高等學校及尋常中學校協議會ニ關スルコト

九 生徒ノ賞罰ニ關スルコト

十 生徒ノ學籍ニ關スルコト

十一 校內ノ警備及衛生ニ關スルコト

十二 各課ノ主掌ニ屬セサル事項

第四條 會計課ニ出納掛及用度掛ヲ設ケ左ノ事務ヲ分掌セシム

第五條 出納掛ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 歳入歳出ノ豫算決算及出納ニ關スルコト

二 資金ニ關スルコト

三 保管證書ニ關スルコト

四 下検査ニ關スルコト

五 出納官吏ニ關スルコト

六 會計ニ屬スル年報及報告ニ關スルコト

七 會計ニ屬スル文書ノ整理ニ關スルコト

第六條 用度掛ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一 物件ノ購入及修理ニ關スルコト

二 物品ノ出納及保管ニ關スルコト

三 土地建物ニ關スルコト